

書評

水谷裕佳著

『先住民・パスクア・ヤキの米国編入』

越境と認定

(北海道大学出版会、二〇二二年)

佐々木直美 (法政大学准教授)

本書は、メキシコと米国の両国にまたがって居住する先住民族ヤキのうち、米国アリゾナ州を中心に居を構えるヤキの一部の人々が米国先住民「パスクア・ヤキ」となっていく過程について、米国先住民研究の視点から描いた意欲作と言える。本書の構成と内容は以下のとおりである。

まずは序章で本書を執筆する動機が明かされている。きっかけは、パスクア・ヤキの人々に対して米国先住民認定の理由や経緯について著者が質問した際の興味深い出来事であった。米国政府による先住民認定は、当該集団の主権の保持、トライブ政府の設置や保留地の獲得などといった米国社会での権利獲得を意味する非常に重要な出来事であるにもかかわらず、先の質問に対する返答は「知らない」または「分からない」といったものばかりであった。

そこで本書は、パスクア・ヤキの人々が自らの歴史について知り、語る一助となるべく認定の経緯についての考察であり、すなわち研究対象者を中心的な説者と想定した研究成果である。以下に本書の構成と各章の紹介を行う。第一章「現代のパスクア・ヤキを取り巻く議論」では、パスクア・ヤキと、米国における先住民認定制度について詳細な解説がなされている。さまざまなレベルで存在する認定基準の紹介は、巻末付録1「インディアン再組織法の概要」と併せて、米国先住民研究のためには言わずもがな、広い意味でエスニック・スタディーズに関心を寄せる者にも貴重な参考資料と言えるであろう。第二章「メキシコにおけるヤキの反乱と越境の再考」においては、パスクア・ヤキの直接の祖先であるヤキが、メキシコのポルフィリオ・ディアス政権（一八七六―一九一一年）下に伝統的な居住地を離れてアメリカへ越境せざるをえなくなった政治・社会的背景が明かされている。それによると、工業化を柱としたメキシコの近代化に邁進していたディアス政権は、経済発展を目的としてヤキが伝統的に居住していた肥沃な土地の収奪に乗り出し、強制移住や反抗的な者たちの奴隷化によってヤキを迫害した。一方、これに対して生じたヤキによる武装蜂起は、米国の新聞でも報じられることとなり、一六世紀にスペイン人がアメリカ大陸へ到達して以来、入植者に対して度重なる反乱を起こしたことで付与さ

れてきたヤキの戦鬪的イメージや野蛮性を不当に強化する偏った報道へと容易に結びついたことも著者は指摘する。

そのなかで当時、米国の新聞が報じたヤキ像についての分析は、ねつ造記事の横行や、文章と写真・挿絵などの映像資料との不整合といった偏見報道が新聞の読者に植え付けられたヤキのイメージを著者は鮮やかに浮かび上がらせる。それによって明らかにしたのは、メキシコのヤキについては恐怖心を煽るような戦鬪的なイメージで報道する一方、アメリカのヤキについては、当時の米国に流布していた米国先住民のステレオタイプに重ね、両者はあたかも異なる集団であるかのように伝えられた可能性である。さらに、

この章における重要な指摘は、米国への移住の意義である。メキシコ政府によるヤキの迫害期とされる一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、伝統的な民族の土地を遠く離れて多くのヤキが国境を越えた動機は、単に個人的理由からではなく、メキシコ軍と戦う同胞に対して国境の向こう側に民族存亡の拠点を形成することも目的であったという視点は重要である。米国のヤキは、武器や資金を非公式のルートでメキシコのヤキのもとに送り届けるなどして、物資・精神の両面において強い繋がりを保持していたことが示されている。また、メキシコ側からは「歴史」が運ばれたという逸話には思わず唸らされた。シャツの内側に文章を縫い付けて、走者が米国に向けて非公式ルートを駆け抜

けたというのだ。この「シャツ一杯の歴史」(五七頁)について、未だそのようなシャツの現物は確認されていないと著者は述べているが、民族存亡の機にヤキが「書かれた歴史」に託したものだといったどんな内容だったのか、つい想いを馳せたくなるのは評者だけではなからう。さて、第三章「米国南西部における観光産業と先住民」は続く第四章とともに本書の核であり、いよいよ米国先住民「バスクア・ヤキ」誕生のプロセスが解明される。当時、国家的アイデンティティの構築を模索していた政府は、先住民に「米国らしさ」の一端を担わせることにした。同時に一九世紀から二〇世紀初頭にかけて鉄道と高速道路が発達すると、メキシコから移住してきたヤキが居住するアリゾナを含む米国南西部では観光開発が盛んに行われたことが示されている。メキシコから買収したばかりの南西部の自然とそこに住む人々は、エキゾチックで魅力的な米国内の観光資源を形成することになった。米国の主流社会が当時求めていた「先住民像」や「国家の歴史」の枠組みにアリゾナのヤキが都合良くはめ込まれて行く様子を豊富な資料によって丁寧に裏付け、そのことが結局は後の保有地獲得や先住民認定へとつながる重要な出来事であることを指摘している点は、カリフォルニア大学バークレー校のエスニック・スタディーズ研究科において米国先住民研究を学んだ著者ならではの手腕であらう。第四章「難民労働者か

ら米国先住民へ」においては、二〇世紀前半に難民として米国社会に受け入れられていたヤキが、安価で重要な労働力の提供者として他の米国先住民と共に米国の労働市場に編入されていく様が描かれている。また、一九三〇年代から一九六〇年代にかけての米国の移民政策および先住民政策の転換と、一九六〇年代に生じたアメリカ・インディアン運動が、ヤキの米国市民権獲得、一九六四年の土地付与、さらには一九七八年の先住民認定を強く後押しし、さらにはヤキの人々に米国社会への積極的な参加の意識改革をもたらしたという指摘は、ヤキと他の米国先住民との関係も著者が意識的に考察の視野に入れていたことがうかがえる箇所だ。第五章「先住民認定後のパスクア・ヤキ社会」では、米国先住民として自覚的に行われているパスクア・ヤキの人々の活動を紹介する（付録2「パスクア・ヤキ・トライブ憲法の概要」参考）とともに、本書の付録3として収められている「パスクア・ヤキ・トライブ憲法（改正中）取締規則第7部…研究」が今後のパスクア・ヤキ研究へ課すことになるであろう課題とその解消へ向けての提案が述べられている。終章においては、再び最初の疑問へと立ち返る。パスクア・ヤキの人々が米国先住民認定の経緯について「知らない」「分からない」と答えた意味について、著者はこれまでの考察から「ヤキの人々の大半が米国先住民認定の過程に参加できなかった、いわば他人

事のように捉えている」（一六八頁）からであり、彼らにとってより重要な出来事は、文字通り自分たちの居場所を確保できた、土地獲得であったと結論付ける。

以上が本書の簡単な要約であるが、最後に評者がとくに興味を抱いた点について若干のコメントを試みる。一点は呼称についてである。「パスクア」がスペイン語で「キリスト教の復活祭」を意味することを注で記し（二三頁）、この呼称が「米国先住民としての権利を獲得した際にトライブとして得た呼称である」（二四頁）と解説しているが、民族やアイデンティティのトピックを扱う本書においては、もう少し呼称に関する考察があっても良いだろう。つまり、なぜ元々の民族名「ヤキ」ではなく、米国においてスペイン語で、しかもキリスト教と関連する語を民族名に冠したのか、という問いである。復活祭（パスクア）との関連で言えば、二月から四月にかけて行われるヤキによる復活祭の儀礼の一部が米国の観光産業によってとくに取り上げられてきたこと、そしてその理由として、祭りがおこなわれるその冬の時期でも温暖なアリゾナをアピールしたかった同産業の意図は指摘されているが（八〇頁）、一九六〇年代に「パスクア・ヤキ協会」が設立され、一九六四年には協会の活動によって土地獲得が実現し、一九七八年の米国先住民認定の際にパスクア・ヤキとして登録された者は当協会に所属する人々に限定されていた（二二二―一

二四頁）事実が示す「バスクア・ヤキ協会」とエスニシティとの関係に疑問が残る。もう一点は、バスクア・ヤキのジレンマについてである。民族の存続を願いながら国境を越え、米国に移住し、アリゾナに居を構えたヤキの人々は、米国で土地と社会的権利を確保し、「バスクア・ヤキ」となる過程で、カリフォルニア、テキサスなどに在住していたため認定基準を満たさなかった民族の一部を切り離すこととなった。さらには、米国主流社会が提供する「インディアン学校」での教育や英語教育を受けることによって主流社会が求める「インディアン像」を内在化し、汎インディアン社会の一員としての意識を高めていった」（二二八、一三三頁）。その結果、著者も指摘する通り、「バスクア・ヤキ」になることで、米国内の認定から漏れたヤキや、メキシコのヤキとは「心理的な距離」が生まれている（一六六頁）。今後、バスクア・ヤキとそれ以外のヤキはどのような関係を築いていくのだろうか。主流社会から得た先住民認定と引き換えに失ったものはないのか。ヤキの人々の「多重的な生の声」が聴こえてくるような研究、あるいは国境や集団を越えた比較研究など、著者の今後の研究に自ずと期待を抱かせるような刺激的な著書であることに間違いはない。

●著者紹介●

- ①氏名……佐々木直美（ささき・なおみ）。
- ②所属・職名……法政大学国際文化学部・准教授。
- ③生年・出身地……一九七一年、長崎県生まれ。
- ④専門分野・地域……ラテンアメリカ地域研究、特にペルー。
- ⑤学歴……南山大学外国語学部（イスパニア科）、東京外国語大学大学院地域研究科（地域研究）博士前期課程修了、東京大学大学院総合文化研究科（地域文化研究専攻）単位取得満期退学。
- ⑥職歴……法政大学専任講師。
- ⑦現地滞在経験……ペルー留学（一七歳、二四歳）、トルコ留学（三二歳）。
- ⑧研究手法……フィールドで現地の人々と話し、出来事を共有し、現実を目の当たりにしたときの発見や気づきが研究への活力と動機になっています。データは主にインタビューとアンケートによって得ていますが、質的研究による分析法をさらに勉強する必要があります。
- ⑨所属学会……日本ラテンアメリカ学会、日本文化人類学会、古代アメリカ学会。
- ⑩研究上の画期……三・一一の東日本大震災以降、社会に貢献できる人と地域の研究とはどのようなものかについて改めて考えるようになりました。
- ⑪推薦図書……関雄二・柴田秀藤編『他者の帝国——インカはいかにして「帝国」となったか』（世界思想社、二〇〇八年）。